

1 建築と自由を求めて海を渡る

1.1 渡米、カリフォルニア、選んだ道

1971年4月1日、サンフランシスコのエアポートに着いた。建築と自由を求めてアメリカへの第一歩を踏み入れた。渡部先生（電機大学建築学科構造担当講師）から紹介していただいた日系二世の建築家ミスターコジマが、私の名をローマ字で紙に書いて迎えにきてくれていた。彼は私のアメリカ滞在の保証人でもあった。当時は、アメリカで保証人となる人がいない限り、私の様に片道切符だけでビザを取りアメリカに来ることは大変難しかった。1ドル360円という時代で、すべての預金をおろして、約40万円程を持って渡米したのであった。



サンフランシスコ全景

オープンカーでエアポートからサンフランシスコの湾の反対側のバークレーにある彼の家まで行った。道が広い、車も大きい、そしてすき透った様な青空が広い、何か大きく広すぎて、空間的に間が抜けた感じであった。

その晩、彼の家族と彼の建築家の友人をまじえて、私の歓迎のディナーパーティーをチャイニーズのレストランでしてくれた。彼等が話をしている英語が何か違う様に早口に聞えた。私が英会話学校で学んだ英語とはだいぶ違う。ほとんどわからない。身体全体に電撃の様な神経がピリピリと走って、硬直した感じだ。最初に受けた大きなショックであった。分らなくても半分分った様に笑いながらごまかして、イエス、イエスと会話をつないだ。

ミスターコジマの友人が私に“アメリカに何をしに来たのですか？”と私にたずねた。

私はゴコチナイ英語で話した。“私はアメリカの現代建築を学びに来ました。どこか建築設計事務所で働かせてもらってお金がたまったら、有名な大学院に入って建築のデザインをさらに勉強し、そしてさらに有名な建築設計事務所で働き自分の腕をみがきたいと思っています。”と冷や汗をかきながら話した。

彼は私に分る様にゆっくりと英語で話してくれた。“若いということは素晴らしいことだ。アメリカは努力すれば物事が達せられる国だが、今は時期が悪い。ベトナム戦争もほぼ終わりに近づき、軍人達が本国に帰っているが、不況で仕事がない。サンフランシスコ地域では8%以上の失業率であり、特に建築関係は最悪である。実をいうと、私も今は失業中なのだ” またしても受けた大きなショックであった。

私はしばらくの間、ミスターコジマの家にお世話になることになった。ミスターコジマもかつては有名な大きな設計事務所で働いていたのだが、今は不況で事務所が縮小されて解雇された後、建築設計事務所では仕事が見つからず、サンフランシスコの電気/ガス会社の企画部で働いているという。そしてチャンスを待つてよい設計事務所での仕事をさがしているという。ジュニア・アーキテクトの仕事はどこかにあるかもしれないとミスターコジマは言って、彼の建築家の友人達に電話をして私の為に面接の手配してくれた。

しかし、どこの事務所も同じで、今は暇なのでプロジェクトが入ったら、もう一度面接をするから仕事の申し込み用紙に書き込んでいってくれ、とのことであった。

その後も私なりにサンフランシスコ郊外の市のオークランドや、バークレーの設計事務所に行ってみたが、どこの事務所も暇で、閉まっている事務所もあった。

とりあえず英語学校に行つて、先行きを考えることにした。州立のアダルトスクールの英語学校は、月謝が無料であったし、バークレー大学のランゲージラボラトリーも無料で使用することが出来た。アメリカはなんと裕福な国なのだろうと思った。

又、私は英語学校の学生ということで無条件でソーシャル・セキュリティー・カードまで発行してくれた。これはアメリカで生活していくうえで税金等の支払いや恩恵を受ける為に、最も大事な身分証明書なのである。特に何をするともなかったなので、昼も夜も英語学校へ通った。嫌いな英語をここまで勉強するとは考えてもいなかった。

英語学校では、私と同じ様な志を持った学生と友人になった。又、バークレー大学の日系2世、3世の建築学部の学生達とも友人になった。バークレー大学は州立の大学で、デザインよりも環境工学の方に力を入れており、すぐれた大学だが、私が望んでいる大学とは違う気がした。



サンフランシスコ市街



サンフランシスコのスカイライン

しばらくして、ミスターコジマの家を出て、その友人となった人の紹介で、アジア系の学生が同居しているフラッチュニテューという寮の一室に移ることにした。

建築学部の学生達は、不景気で建築のアルバイトの仕事はまったく得られず、親友となった「ヤス」の父親はガーデナー（庭師）の仕事をしており、ヤスは”アルバイトとして夏休みはガーデナーの仕事を手伝う、”と言った。多くの彼等の親は一世で、日本語を話すキリスト教の教会に行っている。又、ヤスから、日本からアメリカに留学して、今は、建築設計事務所で仕事をしている信者がいるので教会に行ってみてはどうかと言われた。

その週末に教えられた教会へ行ってみた。大半の信者は、まっ黒に日焼けした顔の農業移民者やガーデナーをしている人達だった。その中に混じって、最近、日本から来たばかりかのように青白い顔をした若い日本人の人達も多く見うけられた。一世の人達の日焼けした顔の深い黒ずんだシワが彼等の苦労を物語っている様であった。「日本はどこから来たのかネ？ 大変だが頑張れば良いことがあるから」と目を細めていろいろ話しかけてくれた。彼等はたいへん親切で日本から来た若者達に教会で昼食等をつくってよくご馳走をしてくれていた。

その教会の信者に野村さんという建築家がいた。ワシントン大学に留学し、卒業して、今はサンフランシスコの設計事務所で働いているという。彼はあまり建築そのものの話をせずにアメリカで仕事を得る厳しさや、それ以上にキリスト教のことをよく話してくれた。

このパークレーのフリーメソジスト教会には、日本から来た若者達の集まりがあり、アメリカでの苦しみや悩みを話し合っていた。ある時1人の若者が“私はアメリカに医学を勉強しに来ましたが、思うような方向に行けませんでした。しかし、キリスト教を信じる事が出来ましたので幸せです。”と言った。私も思う様にかたが、何か方向性を閉ざされた感じで、精神的に参っていた時だったが、しかし、私は間違ってもこの様な言い訳めいたセリフは吐くまい、と自分に言い聞かせた。